

表 1 下平大野 A 遺跡出土石器観察表

※()は残存している値

報告番号	グリッド	出土遺構 /層位	報告書の器種	筆者の認定器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	母岩	母岩の特徴	背面構成の分類	打面の分類	備考
1	D-p15	S H 8	石鎌	石鎌	チャート	1.95	(1.3)	0.2	(0.5)	②	①より透明感がない、	-	-	-
2	D-p15	S H 8	石鎌	石鎌	チャート	(2.8)	(1.6)	0.35	(1.0)	④	灰黒に乳白色が斑らに混じる	-	-	-
3	D-p15	S H 8	石鎌	石鎌	チャート	(2.75)	(1.9)	0.35	(1.0)	⑥	緑黒、不純物を一切含まず緻密、最も良質、	-	-	-
4	D-p14	S H 8 上面	スクレイバー	スクレイバー	チャート	4.25	2.9	0.85	10.6	①	黒灰～灰白、玻璃質強い、	1	b	完形
5	D-p15	S H 8 上面	スクレイバー	スクレイバー	チャート	5.2	4.0	0.9	17.6	⑦	暗黄色	1	a	完形
6	D-s15	S K 6	有舌尖頭器？	石鎌未製品	チャート	(2.8)	(1.8)	0.5	(2.1)	④	灰黒に乳白色が斑らに混じる	-	-	-
7	D-r15	S K 6	剥片	剥片か	チャート	2.9	1.4	0.6	1.8	⑥	緑黒、不純物を一切含まず緻密、最も良質、	2	d	-
8	D-q15	S K 7	剥片	R F	チャート	2.65	1.25	0.35	1.6	②	①より透明感がない、	1	d	-
9	D-q15	S K 7	剥片	剥片	チャート	2.7	2.15	0.75	3.9	①	黒灰～灰白、玻璃質強い、	3	c	-
10	D-q15	S K 7	剥片	スクレイバー	チャート	4.9	1.15	0.7	5.7	①	黒灰～灰白、玻璃質強い、	2	c	完形
11	D-r15	S X 2 周溝	剥片	剥片	チャート	3.9	2.3	0.4	3.8	⑧	くすんだ灰色、不純物を含まず緻密、玻璃質弱い、	3	a	-
12	D-r15	S X 2 周溝	R F	R F	チャート	3.75	2.85	0.9	9.0	①	黒灰～灰白、玻璃質強い、	1	d	-
13	D-q14	包含層	剥片	石鎌未製品	チャート	2.4	1.45	0.4	1.5	③	赤色、褐色の縞が入る	-	-	-
14	D-p15	包含層	碎片	碎片	チャート	4.2	0.9	0.4	1.5	⑨	黒青、不純物を含まず均質、玻璃質あまりない、	-	-	-
15	D-q14	包含層	碎片	碎片	チャート	4.75	1.4	0.6	5.4	④	灰色に乳白色が斑らに混じる	-	-	-
16	D-q14	包含層	剥片 (R F)	R F	チャート	3.4	2.0	0.3	3.3	③	赤色、褐色の縞が入る、玻璃質強い、	1	b	-
17	D-q14	包含層	剥片 (R F)	剥片	チャート	2.8	2.05	0.4	2.3	③	赤色、褐色の縞が入る	1	b	-
18	D-p15	包含層	剥片	石核	チャート	3.65	2.8	0.6	5.7	⑤	黒灰～緑黒、母岩⑥ほど玻璃質が強くない、	-	d	-
19	D-p15	包含層	剥片	剥片	チャート	2.9	2.35	0.7	6.1	①	黒灰～灰白、玻璃質強い、	1	a	-
20	T1	表土その他	石鎌	石鎌	チャート	1.7	(1.4)	0.3	(0.7)	⑩	白透明～灰透明で黒色の縞が入る	-	-	-
21	D-p15	根搅乱	石鎌	石鎌	チャート	1.9	(1.25)	0.15	(0.4)	②	①より透明感がない、	-	-	-
22	D-p15	根搅乱	剥片 (R F)	R F	チャート	2.85	2.45	0.4	3.4	③	赤色、褐色の縞が入る	1	d	石鎌未製品 アザラシ
23	D-p15	根搅乱	剥片	碎片	サヌカイト	3.1	1.15	0.35	0.9	Sa	灰黒、風化する	-	-	-
24	D-l19	風倒木痕	剥片 (R F)	R F	チャート	2.95	2.8	0.75	6.1	③	赤色、褐色の縞が入る	2	a	-
25	D-m17	風倒木痕	剥片	剥片	チャート	3.4	3.2	0.7	7.1	⑪	乳白色	1	d	-
26	-	表採	剥片	剥片	チャート	3.35	2.9	0.8	8.2	⑤	黒灰～緑黒、母岩⑥ほど玻璃質が強くない、	1	b	-

5cm以下と小さいことからも、素材剥片のような状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。下平大野A遺跡内では専ら製品化の工程が行われていたのであろう。

あるいは、剥片の側縁や末端に自然面あるいは石理面を残す例（報告番号の4や5など）から、そもそもの母岩の大きさが拳大より少し大きい程度であって、小型の原石を持ち込んで直接剥片生産していたとも考えられる。

（3）剥片の生産

報告書に掲載されている資料の内、石鏸等を除き剥

片の形状が判断できるものは16点あった。これを上記の分類に基づいて観察した結果は表1及び図2～4のとおりである。また、報告書の掲載遺物以外にも17点の石器を観察し、それらの背面構成は1類が12点、2類2点、3類3点あった。以下、これらの資料を基に分析を進める。

①背面構成の分類

剥片形状の判断できるものを、背面構成のあり方から以下に分類する。なお、背面に自然面を大きく残すものは存在しなかった（図2-①）。

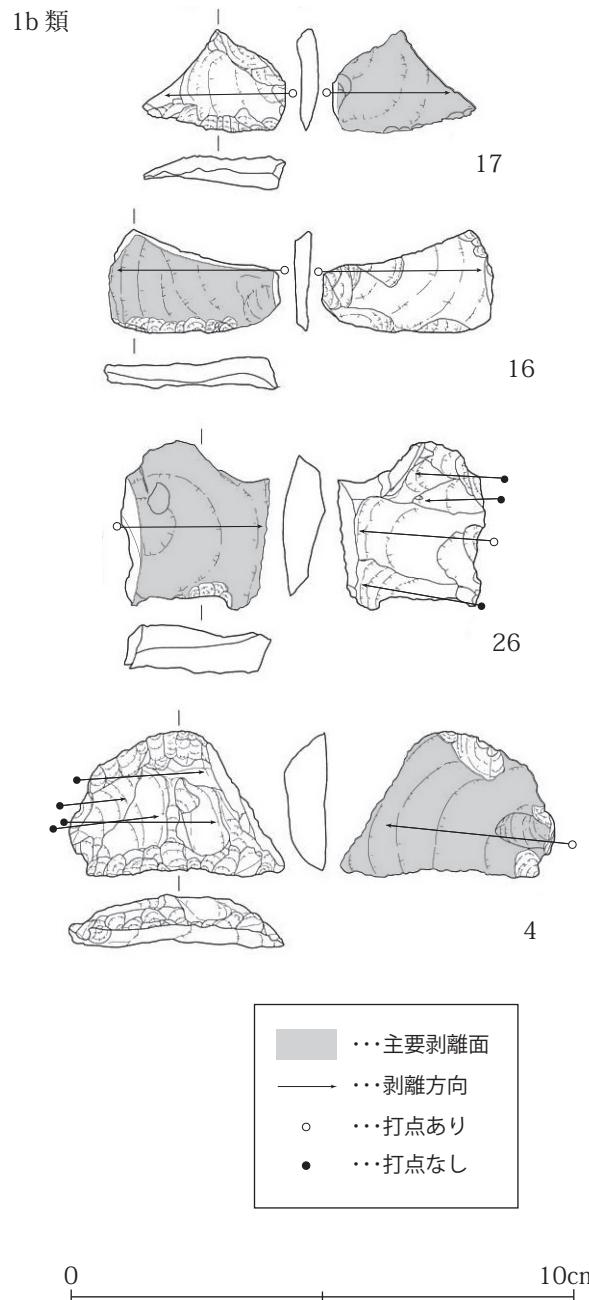
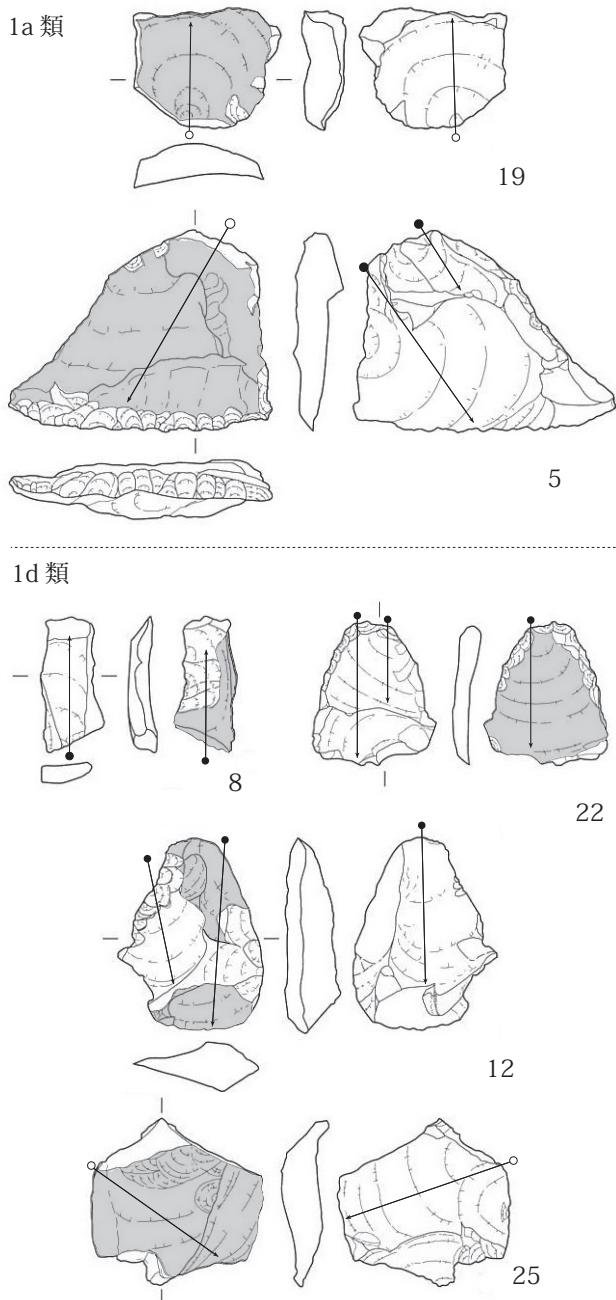


図3 下平大野A遺跡出土石器の分類（1類）(S=2/3)

- 1類…背面構成が主要剥離面の剥離方向とほぼ同方向の剥離のみで構成されるもの。
- 2類…背面構成が主要剥離面の剥離方向と同一方向の剥離に加え、 180° 反対からの剥離面で構成されるもの。
- 3類…背面構成が主要剥離面の剥離方向と同方向の剥離に加え、 90° 程度した転移した剥離面で構成されるもの。

②打面形状の分類

下平大野 A 遺跡において、剥片生産時の打面の形状が判断できるものを、以下のとおり分類する(図 2-②)。

- a類…自然面を打面とするもの。
- b類…単剥離面打面、もしくは、石理面を打面とするもの。
- c類…点状、もしくは線状に打面がつぶれているもの。
- d類…欠損等により打面が確認できないもの。

③剥片生産

生産された剥片の打面を観察できるものは、欠損等により打面形状が判断できない d 類 6 点を除くと、10 点中 a 類 4 点、b 類 4 点、c 類 2 点であった。線状、点状となっている c 類が 2 割存在するものの低率である。実際には、自然面(a 類)ないし剥離面・石理面(b 類)の別を意識しているというよりは、平坦な打面を好んでいることが窺えた。目的剥片の生産にあたって入念に打面調整をして獲得しようというような旧石器時代に特徴的な意識は一切窺えなかった。

また、背面構成は 18 点中、1 類が 12 点、2 類が 3 点、3 類が 3 点であった。報告書に掲載されていない剥片を含めると、その数は 35 点中、1 類が 24 点、2 類が 5 点、3 類が 6 点となる。1 類が 2/3 以上を占め圧倒的であることが明らかで、2・3 類は副次的であった(図 2-③)。

これらの分類から、下平大野 A 遺跡の剥片生産は、かなり固定的で単純な方であることが判明する。すなわち、平坦面の打面を選択し、それを固定したまま順次後退させながら連続的に生産していく姿が復原

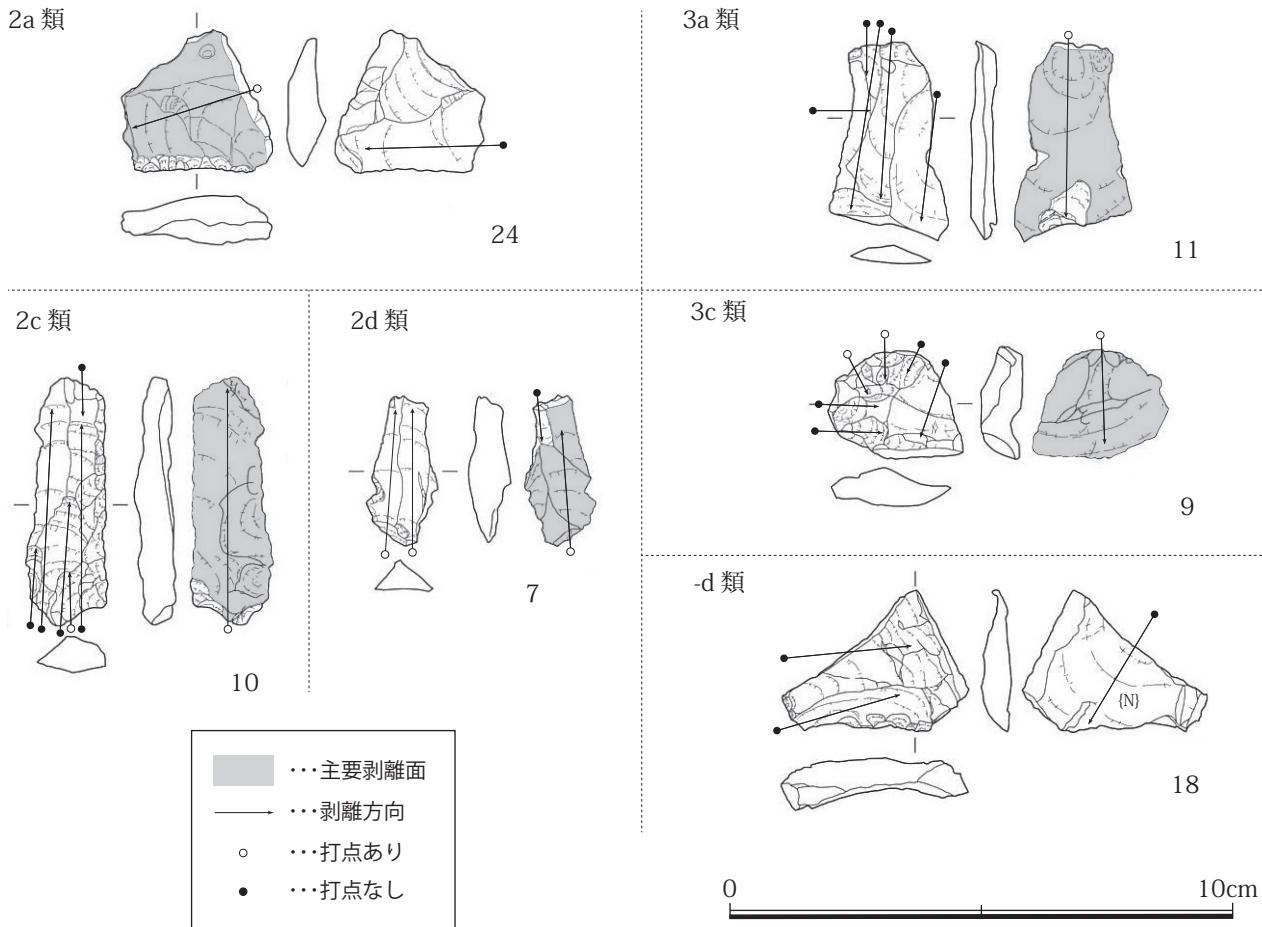


図 4 下平大野 A 遺跡出土石器の分類 (2-3 類) (S=2/3)

できる。このような生産方法を進めていくと、その過程で母岩の縁がやや凸状に取り残されることが間々生じてくる。この際に最大限効率的に剥片を獲得しながら、母岩の歪み補正していくために行われる副次的な工程が、 $90^\circ \sim 180^\circ$ 程度の打面転移であり、2・3類として表れているものと想定可能である。ただし、2類は打面が欠損しているd類との相関が高いので、一部剥片生産（母岩が保持できなくなった最終段階など）にあたって両極打撃が用いられた可能性が考えられる。

3. 下平大野A遺跡の評価

前述までの分析結果から、下平大野A遺跡の石器には以下のことが指摘できる。

- ・母岩の色調は黒灰から灰白色系と赤色系の二者が主体を占めながらも母岩数が多いことから、近隣に石材の採取場所があったと考えられること。
- ・石核や敲石類が存在しないことや背面に多くの自然面を残すような剥片が存在しないことから、母岩から素材剥片の生産を行う工程は遺跡外で行われていたか、あるいは小型原石を直接持ち込んでいた可能性が高いこと。
- ・自然面の平坦な箇所を選択し、限りなく打面を固定しながら連続的に剥片を生産していること。これはほぼ全ての母岩でも同じであるため、該期に通有な剥片 生産技術であったと考えられること。
- ・いわゆるチップの回収は少ないが2~3cmの小型剥片が出土していること、石鏃の未製品が存在することから、必要に応じて製品化していたと推定できること。

また、下平大野A遺跡の石器組成をみると、製品は石鏃やスクレイパーに偏っており、磨石・石皿は一切出土していない。のことから、堅果類への適応は窺えず、狩猟生活に重点があったと想定できる。下平大野遺跡では定住生活の目安の一つとされる、堅穴住居と想定される大型土坑が検出されている。同じように松阪市の粥身井尻遺跡でも堅穴住居はあるものの、磨石・石皿はなく狩猟具に偏った石器組成している。一方、滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡では堅穴建物から石鏃と石皿・磨石がとともに出土しており、三重県と滋賀県では異なる様相が窺える。三重県では、堅穴住居と堅果類の利用の開始が一致しない可能性が示唆されるため、今後注意して検討する必要がある。

おわりに

草創期の剥片剥離技術が窺えるような石核や剥片が

得られている遺跡は県下にはほほないが、草創期の土偶が出土したことで知られる松阪市の粥身井尻遺跡では、草創期の遺構面の下位から大型の剥片等が86点出土しているという。これらの資料は2点が図示されているのみで、詳細不明となっている²⁾が、対比資料として今後検討していきたい。

謝辞

本稿の執筆に当たっては、下記の方々ならびに機関からご協力いただいた。感謝申し上げます。

新名 強、水谷 豊、石井智大、中村法道、三重県埋蔵文化財センター

矢野先生のご退官、お慶び申し上げます。先生とは大学生の頃にお会いして以来、関西縄文文化研究会などで発表の機会を与えていただいたり、論文執筆のお話をいただきなど、様々な機会で導いていただきました。縄文時代の研究を志す者として精進いたしますので、今後ともご指導ください。退官されましても、矢野先生のますますのご活躍を祈念しております。

補注

- 1) 報告番号5のスクレイパーは唯一の母岩^⑦である。明らかに特徴の異なる暗黄色の石材であり、他所で生産されたものが製品として持ち込まれた可能性が考えられる。
- 2) 草創期の堅穴住居等の遺構面の下位ということが判明しているだけで、どこまで遡る資料かは不明である。旧石器時代のものかもしれないし、そもそも人工遺物かどうかさえ疑わしいため、実見した後に評価したい。

参考・引用文献

- 新名 強 2024 『下平大野A遺跡発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター
高木宏和・三島美奈子 2008 『渡会川北遺跡』 美濃市教育委員会
田部剛士 2002 「縄文時代草創期・早期の石材利用」 『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』 関西縄文文化研究会
中川 明 1997 『粥身井尻遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
松室孝樹 2014 『相谷熊原遺跡I』 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会